

図書館講演会 開催報告 令和7年12月21日(日)

「葛屋重三郎時代の江戸文芸・文化」

法政大学文学部教授の小林ふみ子先生をお招きし、「葛屋重三郎時代の江戸文芸・文化」をテーマにご講演いただきました。小林先生は、日本近世文学・文化を専門とされており、大河ドラマ「べらぼう～葛重栄華乃夢嘶～」の放送期間中には、関連コラムの執筆も担当されました。



講演の冒頭、先生が「大河ドラマ『べらぼう』を観ていた方はどれくらいますか?」と問いかげられると、多くの方の手が挙がりました。「この質問をすると、意外と見ていない方が多いこともあるのですが、今日はたくさんいらっしゃいますね!」と先生が笑顔で応じられ、和やかな雰囲気の中で講演が始まりました。

江戸っ子の誕生、その誇りと時代背景というお話に始まり、葛飾北斎の『画本東都遊(えほんあずまあそび)』に描かれた当時の耕書堂の店先の光景へと移ります。葛屋重三郎が店を構えた日本橋界隈だけでなく、江戸には芝や日本橋など、いくつかの大きな書店街が存在していました。これらはいずれも旅人たちが通っていくところ、日本橋はすべての街道の拠点。芝は東海道へ向かう人々が通る要所でした。絵の中には、笠を手に長旅のための実用書を選ぶ人、故郷への土産を買い求める人々の姿が描かれています。当時の人々の日常に、出版文化が豊かに息づいていたことが伝わってくるお話でした。

会場で何度も笑いが起ったのが、黄表紙 山東京伝画作の『江戸生艶氣樺焼(えどうまれうわきのかばやき)』の解説です。ドラマでも描かれていましたが、今回はダイジェスト版でお話しいただきました。主人公は大富豪「仇氣屋」の一人息子・艶二郎。彼は「自分はモテモテだ」という噂を世間に広めたい一心で、金に糸目をつけず奇妙な行動を繰り返します。架空の女の名を腕一面に彫りこみ、「色男の証し」と喜んだり、芸者を金で雇って自宅に駆け込ませる芝居を打ったりしますが思ったほど噂にもなりません。やがて「色男といえば心中」と考え、遊女・浮名を身請けし、嘘の心中を

企てます。大げさな準備を整え、駆け落ちを決行しますが、隅田川へ向かう途中で盗人に遭い、二人そろって着物をはぎ取られるという結末を迎えます。実はこの盗人、艶二郎の父と番頭が仕組んだ芝居であり、艶二郎はようやく自分の愚かさを悟ります。「ほんとうの人間」となることを誓った艶二郎は、浮名と夫婦となり、家業を繁盛させたというあらすじです。葛屋重三郎が出版し、当時大人気だったそうです。



また、宿屋飯盛(やどやのめしもり)、腹唐秋人(はらからのはきんど)、大屋裏住(おおやのうらすみ)、頭光(つぶりのひかる)といった、珍妙なペンネームを名乗る人々が集い、狂歌を通して交流を楽しんだ世界についてもお話しいただきました。
四方赤良(よものあから)こと大田南畝(おおたなんば)や元木綱(もとのもくあみ)

らが牽引した狂歌文化は、まさにこの時代に花開いた、遊び心と知性に満ちた江戸文芸的一面です。その奥深い魅力についてのお話に、会場の皆さんも熱心に聴き入っていました。

講演の最後には、喜多川歌麿の観察眼が生かされた『画本虫撰(えほんむしえらみ)』、『潮干(しおひ)のつと』が取り上げられました。先生の解説を聞いたうえで改めて絵を見ると、その細やかな表現がいっそう際立ち、より美しく見えたのではないかでしょうか。

18世紀後半の江戸を彩った文芸を通して、葛屋重三郎の時代の江戸文芸・文化をまるごと体感できるような講演となりました。参加された方からは、「浮世絵や戯作を通して、葛重の時代の出版文化の隆盛がよくわかった」「専門家ならではの知見に触れることができた。」「先生の本を読んでみたいと思った」といった声を頂戴しました。

府中市立図書館では、『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』(岩波書店、のち角川ソフィア文庫収録)『へんちくりん江戸挿絵本』(集英社インターナショナル) を含む小林ふみ子先生のご著書を多数所蔵しています。ぜひお読みいただきたいと思います。